

## 産業遺産の活用に向けての一考察

### —講座「千葉県の産業遺産とその活用を考える」の実施を通じて—

\*小笠原永隆

Nagataka OGASAWARA

**要旨：** 千葉県立現代産業科学館では、講座「千葉県の産業遺産とその活用を考える」を2か年にわたり実施した。24年度では「軍郷千葉」及び「水産業と町並みの発展」をテーマとして、座学及び現地巡検を実施した。この講座では単に知識を蓄積するだけでなく、文字通り「遺産」の「活用」方法検討を目的としている。活用推進においては、地域住民が中心のガイド組織が重要な役割を担っている。受講生は、広域的なテーマの下で各地域の産業遺産をつなぎ、ガイド組織と連携しながら、来訪者への案内プログラムを作成する人材となることが期待される。同時に当館の役割として、産業遺産に関する資料蓄積及び研究を行っていくことが期待される。

**キーワード：** 産業遺産 活用 地域住民 ガイド組織 サポーターズ 人材養成

#### 1 はじめに

千葉県の産業遺産の活用に関しては、小笠原(2011・2012)において、本館の資料蓄積に加え、地域資源としての活用に向けたストーリー構築やマネジメントを行う機能を持つべきであることが、今後の課題であることを指摘した。

このような課題を解決するために、本館では平成23・24年度の2か年にわたり講座「千葉県の産業遺産とその活用を考える」を実施した(図1・2)。本稿では、この実施結果を通じて、県内の産業遺産活用に向けた課題解決のための方策について考察を行っていくこととする。

#### 2 平成24年度講座「千葉県の産業遺産とその活用を考える」について

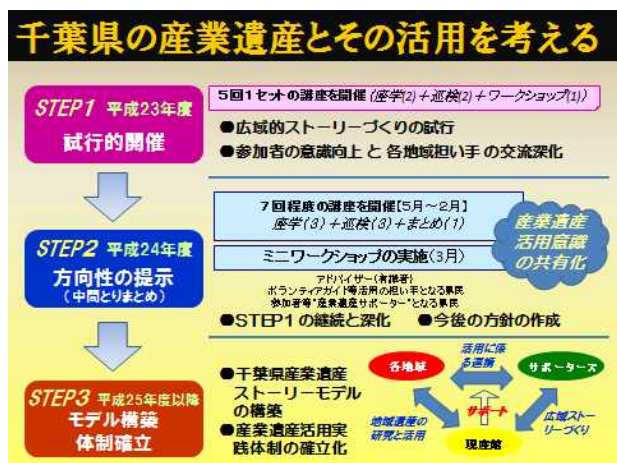


図1 講座イメージ

図2 平成24年度講座募集チラシ

### (1) 概要

今年度は講座2年目ということもあり、4月後半から受講生の募集を開始し、6月から実際の講座を開始することとなった。月1回の開講を基本としたが、8月及び10月は行事が集中することから開催しないこととし、2月末までに計8回を開催した(第2図)。

本年度は、2つのテーマを設定し、それぞれ町並みの発展にどのようなかわりがあるのかということについて、産業遺産の観点から探ることを主眼とした。テーマは「“軍郷千葉”の痕跡を探るー習志野～千葉ー」と「水産業と町並みの発展を探るー船橋～行徳～浦安ー」を設定した。それぞれ関係する地域について、昭和初期に松井天山が作成した千葉県内の「市街鳥瞰図」(図3)をメインテキストとして使用することとし、昭和初期と現在の姿を比較しつつ、往時の痕跡を探して現地を巡検することとした。

カリキュラムの構成は、「ガイダンス講座1回、  
テーマ①：室内講座1回+現地巡検2日間

テーマ②：室内講座1回+現地巡検2日間、まとめ・ミニシンポジウム1回」とし、基本的には昨年度と同様であるが、産業遺産に対する認識を高めることを狙いとして、現地巡検の回数を増やしている。つまり、2つのテーマそれぞれについて、知識を習得した次は、必ず現地で2日間関連する遺産を見学することとした。なお、現地では単に遺産を見るだけではなく、可能な限りボランティアガイドの方に案内をしていただくことで、地元でどのような活用がなされているのか、肌で感じられるように心がけた。

なお、本年度のカリキュラムの詳細は次のとおりである。

第1回(6月9日)

【ガイダンス】「本講座の趣旨・等」(当館職員)

【座学】「千葉県の産業遺産について」

(東京産業考古学会 平井東幸氏)

第2回(7月16日)

【座学：「軍郷千葉」の痕跡を探る】



図3 松井天山作「千葉県津田沼町鳥瞰」(昭和3年)



「松井天山の都市鳥瞰図を読み解く—木更津での実践を通じて」

(木更津市役所 甲斐博幸氏)

「千葉県の鉄道連隊について」

(講師 東京大学准教授 鈴木淳氏)

第3回(9月8日)

【巡検：“軍郷千葉”の痕跡を探る】

習志野市内(鉄道第二連隊及び騎兵連隊関連)

第4回(9月9日)

【巡検：“軍郷千葉”の痕跡を探る】

千葉市内(鉄道第一連隊関連)

第5回(11月11日)

【座学：水産業と街並みの発展を探る】

「船橋～行徳～浦安の街並みと産業遺産」

(当館職員)

「浦安の水産業と街並み」

(浦安市郷土資料館 尾上一明氏)

第6回(12月2日)

【巡検：水産業と街並みの発展を探る】浦安市内

・第7回(1月20日)

【巡検：水産業と街並みの発展を探る】

市川市行徳地区及び船橋市湊町～本町周辺

第8回(2月24日)

【まとめ・ミニシンポジウム】

(帝京大学教授 大下茂氏, (株)サルベージ  
滝沢細雪氏, ならしのコンシェルジュ研究会  
平野金幸氏)

## (2) テーマ①「“軍郷千葉”の痕跡を探る—習志野～千葉—」

本テーマの座学では、軍隊が置かれたことで都市として発達した千葉の特異性を探ることを目的として、特に日露戦争後、鉄道連隊という特殊な部隊が設置された千葉市と習志野市に主眼をおいた。東京大学鈴木准教授からは、鉄道連隊の創設及び千葉県内へ設置されるに至った経緯に加え、役割と実態、その後の変遷についてまで解説をしていただいた。木更津市の甲斐氏は、同市文京公民館で「街並み探検隊」を組織し、市民とともに松井天山の「千葉県木更津町鳥瞰」(昭和4年)及び「木更津町鳥瞰図」(昭和11年)を解析する作業を行っている。本講座では、この時の成果を中

心として、松井天山の絵図の特長や分析するにあたっての見どころなどについて解説をしていただいた。

現地巡検は2日間連続で実施したが、残暑が非常に厳しい時期を考慮して、1日目の午前中及び2日目の午後は、自由参加のオプションとして新京成線沿線の鉄道連隊関連遺産、四街道駅周辺の野戦重砲連隊関連遺産等について巡検を行った。メインの巡検は、習志野市内(津田沼～大久保)の鉄道第二連隊及び騎兵連隊、千葉市内の鉄道第一連隊等の関連遺産についてそれぞれ巡検を行った。各所の巡検場所は下記の通りである。

9月8日(土)

10:00～12:00(新京成線沿線の鉄道連隊関連遺産)

鉄道連隊演習線跡および橋脚見学(図4)

(鎌ヶ谷市東道野辺 アカシア児童遊園)



図4 鉄道演習線橋脚跡



図5 鉄道第二連隊営門見学の様

新京成線高根公団駅－高根本戸駅間に所在する「陸軍」銘のある境界杭見学（船橋市）  
13:00～16:00（習志野市内の鉄道第二連隊及び騎兵連隊関連遺産）  
千葉工業大学通用門（旧鉄道第二連隊営門）  
（図 5）  
津田沼一丁目公園（K2 型 134 号機関車展示）  
大久保駅前ハミングロード  
（鉄道演習線跡説明板）  
大久保商店街①（秋山好古記念碑）  
大久保商店街②（騎兵ミュージアム）（図 6）



図 6 騎兵ミュージアム見学の様子  
※この場所は商店会が中心となり、空店舗を利用して設置された。



図 7 騎兵旅団司令部跡にて説明をする平野氏  
（中央・ならしのコンシェルジュ研究会）

（以下についても見学予定であったが、猛暑による参加者の体調を考慮して省略した。）

東邦大学（騎兵第十三連隊記念碑等・兵廠跡）  
日本大学（騎兵第十四連隊記念碑等）  
八幡公園（騎兵旅団司令部跡）（図 7）  
習志野の森（陸軍習志野学校跡）  
市立習志野高校（糧秣廠跡）  
東習志野三丁目民家（旧支那囲壁砲台）  
東習志野四丁目児童遊園  
（ドイツ人捕虜収容所跡）

9月9日（日）  
9:30～12:00（千葉市内の鉄道第一連隊関連遺産等）  
千葉公園（鉄道第一連隊 演習用隧道・架線演習用橋脚等）（図 8・9）



図 8 鉄道第一連隊関連遺産見学の様子



図 9 鉄道第一連隊演習用隧道にて

椿森公園周辺（鉄道第一連隊跡・記念碑・旧兵舎等）  
千葉経済大学（鉄道第一連隊材料廠－修理工場・レール跡等）（図 10）



川光倉庫千葉支店（気球連隊気球格納庫）  
作草部公園（陸軍歩兵学校跡）



図10 鉄道第一連隊材料廠



図11 野戦重砲第四連隊将校集会所門跡

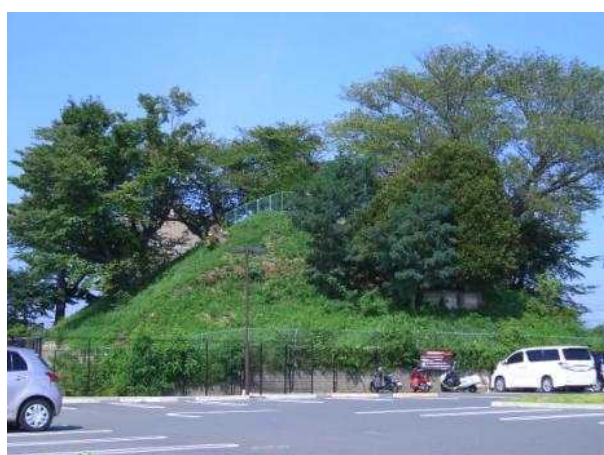


図12 ルボン山

※射撃訓練の目標として設置された。

13:30～16:00（四街道市内の野戦重砲連隊関連遺産等）

愛国学園（野戦重砲兵第四連隊正門）（図11）  
四街道市中央公民館（将校集会所跡・松ヤニ採取跡）  
ルボン山（「砲兵射塚の跡」石碑）（図12）  
陸軍野戦砲兵学校跡・陸軍墓地跡

習志野市内の巡検については、習志野コンシェルジュ研究会の平野氏にご案内をいただいた。

また、帝京大学経済学部大下茂教授（観光経営学）とゼミ参加学生5名は、筆者との共同研究の形で松井天山「津田沼町鳥瞰」(昭和2年)の分析と鉄道第二連隊及び騎兵連隊についての調査を行い、現地巡検にも参加していただいた。なお、大下教授並びに参加ゼミ学生5名の多大なご協力により、『松井天山の鳥瞰図と軍郷「習志野」』と題した展示パネルを作成し、当館エントランスホールに展示した（図13）。

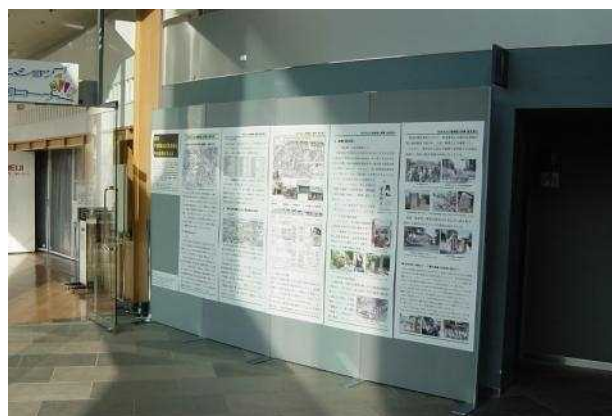


図13 帝京大学大下ゼミの協力によるパネル展示『松井天山の鳥瞰図と軍郷「習志野」』

### (3) テーマ②「水産業と町並みの発展を探る—船橋～行徳～浦安—」

本テーマでは、東京湾との関わりで街並みが発達した地域について知識を身につけ、現地を歩くこととした。船橋は江戸時代の「御菜浦」としての大規模な漁師町、行徳は塩田及び河岸、浦安は海苔とアサリなどと、それぞれ特色を持つ海に関わりを持つ産業が栄えることで、人が集まり、町並みが形成されていった。浦安市郷土博物館 尾上一明氏からは特に浦安の水産業と民俗について解説をしていただいた。

巡検では、各地区のボランティアガイドの方々に解説をしていただいた。浦安地区では「ぶらり浦安ボランティアガイド」の山崎勝哉氏、行徳地区では「市川案内人の会」の石田道男氏・菊池貞子氏、船橋地区では「船橋ディスカバー実行委員会」の海老原義憲氏にそれぞれ御案内をいただいた。なお、各所の主な見学場所は下記の通りである。

12月2日(日)

9:30～15:00 (浦安における水産業と町並み)

旧江戸川渡船乗場跡

清瀧神社・リンド水準標石(図14)・

旧宇田川家住宅・旧大塚家住宅・

フラワー通り・境川小橋・豊受神社・

左右天命弁財天・浦安市郷土博物館・

鉄鋼団地・浦安市総合公園



図14 リンド水準標石(清瀧神社内)

1月20日(日)

9:30～12:00(市川市行徳地区における水産業と町並み)

徳願寺・妙覚寺・法善寺(図15)・

加藤邸・笹屋うどん跡・

常夜灯(図16)・浅子神輿跡・

おかね塚・押切稻荷神社



図15 法善寺(塩場寺)で案内をする石田氏(右側:市川案内人の会)



図16 常夜灯見学の様子

12:30～16:00(船橋市本町～湊町における水産業と街並み)

美松(ばか面ラーメン)・川守商店(三番瀬海苔)

(図17)・海老川(船橋橋・八千代橋・船溜り)・

船橋ヘルスセンター跡地(劇場前バス停)・

船橋漁港・水門・玉川旅館(図18)・

本町稻荷神社





図 17 川守商店にて案内をする海老原氏  
(中央：船橋ディスカバー実行委員会)



図 18 玉川旅館見学の様子

#### (4) 受講生の参加動機と反応

最終回(平成25年2月24日)にまとめとなるミニシンポジウムを行う。一年間の講座を振り返り、学識経験者及び県内外で産業遺産の活用に取り組んでいる方達の話聞いたうえで、全体の意見交換を図り、「産業遺産」の活用についての認識を高めることをねらいとする予定である。この結果については、他の機会に述べることとし、ここでは第7回終了時までの状況について記すこととする。

昨年度に引き続き、全回出席を原則とし、巡検参加に伴う移動費用などすべて自己負担とするなど、参加条件がかなり厳しかったこともあるが、受講生の意識は概ね高く、座学・巡検ともに熱心に取り組む姿が見られた。なお、今回参加を申し

込んだ22名中11名が昨年度に引き続いての参加者であり、リピーター率が50%と高い比率であったといえる。また、昨年度と同様に約9割の方が65歳以上の男性であった。高度成長期を支えてきた「産業」に仕事として携わってきた経験が、「産業遺産」の強い興味へとつながっていることが推察される。

この講座では、巡検時には可能な限り地元のボランティアガイドの方に案内をしていただくとともに、町並みを散策するという「まち歩き」的な要素をあえて組み込んでいる。単なる歴史遺産めぐりではなく、その「産業遺産」がその場所にある意味、町並み全体との関わり、さらには地域の中での現代的意義=さまざまな局面における活用について、それぞれ考えることを目的にしたからである。

この結果、巡検中も多くの受講生から、見学した「産業遺産」の管理や活用の現状に加えて、「町」の発達した理由についても質問を多く受けた。「産業遺産」と「町」の関連性におぼろげながらも興味を持ち始めた結果と考えられる。最終回のワークショップで、この点について議論を進化させることができれば、当初の狙いへと近づくのであるが、それはファシリテーションを行う主催者側の力量もあり、まだ難しいかもしれない。

### 3 平成23年度講座におけるミニワークショップの結果について

平成23年度の講座内容については、小笠原(2012)において詳述しているので省略するが、最終回のミニワークショップについては実施時期が年度末となり、触れることができなかったのでここで紹介及び内容の検討を行うこととする。

銚子・佐原地区(醸造業と流通業で発達した街並み)と茂原・大多喜地区(天然ガスの採掘で発達した街並み)に検討班を分け、次の各点について意見を出し合った。

- 1 見学した産業遺産の現状について思ったこと
- 2 現地の方々の取組みについて思ったこと
- 3 産業遺産の活用これから必要なこと

両班とも積極的に意見が出し合われ、ややもするとまとまらないことが懸念されたが、参加者各

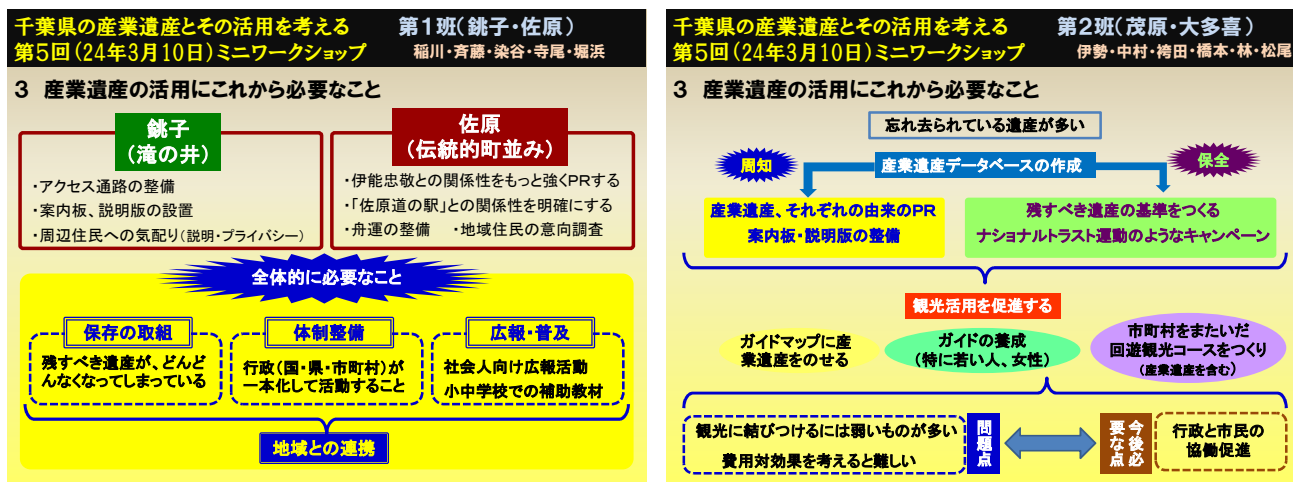


図19 平成23年度講座ミニワークショップにおける討議結果

自の協力により、図19のように集約することができた。各地域の実情により、出された意見には異なりが見られるが、根底ともいえるべきところは共通性が見られる。つまり、産業遺産の価値を地域住民はもちろんのこと、来訪者にもわかるようPRにするなど、行政と市民が協働して保存への取組みをしなければならないということである。そして、産業遺産と行政と市民もしくは来訪者という三者の仲立ちを期待される組織として「ボランティアガイド」が挙げられている。

#### 4 産業遺産の活用に向けた取組み

##### (1) 「産業遺産」の保護・保全・活用

「産業遺産」の定義は様々で、当初は近代以降の産業技術発展を示すものが取り扱われていたが、次第に年代の幅は広がり、人類の技術史全般まで包括されるようになってきている。そして、「産業遺産」を研究する学問として「産業考古学」が位置づけられている(平井2009)。

「産業遺産」のうち、自治体の文化財行政が把握する「指定文化財」として保護の対象になるものは、ごく一部であろう。そもそも、「文化財」としての取扱いを基本的に近世以前のものとしている自治体が多い。したがって、大半が近代以降の「産業遺産」については、そもそも検討の対象から外れる場合がほとんどである。この穴を埋めるべく、文化庁は平成8年に登録有形文化財制度をスタートさせ、近代以降の重要建造物等の保護を進めている。経済産業省では、平成19年から「近

近代化産業遺産」の認定を始め、日本の近代化を示す遺産の活用に取り出している(図20)。



図20 経済産業省による「近代化産業遺産」

注意すべき点は、両者とも国が関与して「登録」及び「認定」を行うが、いわゆる「指定文化財」のような手厚い保護処置がなされるわけではない、ということである。基本的に、保存に係る直接的な補助等は行われていない。しかし、「指定文化財」が小規模な現状変更にも大きな制約がかかるのに



対し、現状を損なわない程度の修理や改修など「保全」に関する自由度は高い。さらに、各種店舗等、集客交流等に「活用」するにあたっては、有効な看板となることが期待され、様々な助成を受けるにあたって間接的に役立つ場合が多い。

そもそも「産業遺産」は、産業技術の発展過程を示すメモリアル的なものであり、新しいものに作り替えられていくことが宿命である、ともいうことができよう。技術史など学問的評価が確定するのは、役目を終えてから、しかもかなりの年月が経過したところであり、気がつけば失われている場合がほとんどである。運良く残っているものも、積極的というよりも消極的に残されている（たまたま取り壊されずに使用されていた、倉庫の隅でほこりをかぶっていた、など）のであり、タイミングによってはすぐに消失してしまう恐れが強い。だからと言って、学問的な重要性が認識されれば、それで保存と相成るであろうか。小さなものであれば、博物館等の収蔵品となることも不可能ではないだろうが、えてして重厚長大なものであったり、朽ちかけた建造物であったりする「産業遺産」は、その所有者の善意に頼るしかすべがない。先に述べたように、行政の直接的な保護措置は期待できないからである。

このような現状の光明となるのが「活用」であろう。先の「近代化産業遺産」は、様々な近代化ストーリーの中に産業遺産を組み込むことにより、教育のみならず観光分野においても「活用」しやすくする工夫が最大の特徴である。単体では活用が難しいものでも、国全体とは言わずとも、地域産業等の物語中に位置づけることで、誰にでもその価値が分かりやすくなり、集客交流をはじめとする地域活性化の材料とすることができよう。ちなみに、「地域活性化」や「集客交流」をキーワードとすることにより、文化系のみならず商業・産業系・地域づくり系・観光系など、集客交流を軸とする様々な助成制度にエントリーすることが可能となる。

もちろん、このような活用が保護や保存を担保するものではないが、その糸口となることが期待される。様々な局面で積極的に活用し、多くの人たちの目に触れることにより、徐々にその重要性

に対する認識が高まり、初めて保護あるいは保存という言葉が出てくるのではないだろうか。いきなり、保護や保存を行政に訴え出たところで、予算のことや制度の対象外であることを言われるであろう。また、その価値がよくわからない地元住民の大半は、冷めた視線を向けるか、お付き合い程度の協力（署名など）をするにとどまるのが関の山であると思われる。

## （２）「活用」における地域住民の参画

産業遺産は、そのものが存在する地域の産業技術の発展過程を示すものであり、地域の経済を支えていたものである場合が多い。つまり、地域と密着しているものであり、その活用にあたっては、地域住民との協働なくしては不十分なものでしかないと考えられる。

地域住民の参画形態で、近年一般的になりつつあるのが「ガイド」であろう。ボランティアの場合が多いが、有料で実施している組織もある。「地域住民」が自ら「産業遺産」及び関連事項について理解し、知識を深め、他の地域住民や来訪者にわかりやすく説明をしてくことで、「産業遺産」と「地域住民」、来訪者との「橋渡し」としての役割が期待される。先程触れた、昨年度の本講座ミニワークショップの結果を見ても、ガイドの役割は高く評価され、期待される部分が大きいことが明らかである。

そもそも、よほどの遺産でなければ商業ベースに乗るわけもなく（よほどのものであれば、当初から文化財指定を受けていると思われるが）、受付の人が常駐したり、旅行会社が団体を連れてきたりすることもない。儲けは少なくとも（あるいは非常に少なくとも）、地元のボランティアが中心となって案内を始めなければ、研究者かよほど好きな方以外は、その遺産に積極的に近づく機会はほぼ皆無と言っていいだろう。つまり、地元ガイドの存在は、遺産を活用するにあたり比較的早い段階で、かなり重要な役割を担うことになる。

ガイドは地域住民が主体となることが望ましいが、決して外部の者を排除するものではない。少数でも入った方が、仲間内で固って井の中の蛙になることを防止し、望ましい場合が多い。実際、

市街地にあるガイド組織では、本来の地元住民は非常に少なく、大半が移り住んできた人たちであることが多い。たまたまそこに家を買って、子育てを終え、仕事を定年退職し、はじめて自分の住んでいる地域に目を向け、興味を持つようになった方が多いようである。様々なキャリアを持っている方々がそれぞれの得意分野を活かしていくことで、活動に特色がある組織となっていくことも珍しいことではない。

### (3) 「活用」に際する現代産業科学館の役割

ここで、当館で実施している講座の意義について考えてみたい。本講座はガイド養成を目的としたものではない。産業遺産に興味を持つ人たちが、さらに知識を深めるだけでなく、その活用についての方策を考えることを目的として実施している。当講座を受講してガイドに興味を持ち、ガイドとして活動する人もいるだろう。それはそれで非常に喜ばしいことである。だが、県立館である当館が実施する意味合いを考えると、ある程度広域性＝各地域を関連付けて考える姿勢が求められると思われる。

つまり、経産省による「近代化産業遺産群 ストーリー」のように、テーマ性を持って地域の枠を超えた物語を作成し、それに合う産業遺産などをピックアップするだけでなく、新たな遺産を掘り起こしていく姿勢である。無論、関連する事項を綿密に調べ上げるとともに、現地をしらみつぶしに歩くことが必要であることは言うまでもない。そして、各地域のガイドの方々と連携し、来訪者に適切な説明ができるような体制を作り上げていくのである。こうした役割を当館が担うと同時に、講座を開催してくことで、今後その役割を担う人材を育成することが求められるのではないだろうか。

こういった人材は、基本的には「コーディネーター」と呼ぶかもしれないが、「マネージャー」に近い動きをすることが求められる。あるいは、産業遺産の活用を推進するとともに、体制を支えていく市民であることから「産業遺産サポーターズ」ということができるかもしれない。この「サポーターズ」となる人材を養成していくことが、まさ

に県立館としての当館の重要な役割となろう。

## 5 おわりに

「講座 千葉県の産業遺産とその活用を考える」の講座開催も2年目が終了目前となっている。実施結果から、今後当館の果たすべき役割を考えてみたわけであるが、当然「産業遺産」に関する基礎的な資料蓄積及び技術史学的見地からの学術的検討を無視してはならない。幹なくて枝葉は伸びないからである。根幹をしっかりしつつ、活用という応用的側面へと伸びていかなければ、薄っぺらな葉しか生成されないであろう。だからと言って、幹だけに執着したところで、社会的使命を果たすことができない。このバランスをとりつつ、担い手となる人材の育成プログラムを作成し、各地域のガイドとの連携を進めることが必要である。このように来年度以降は、協働型である「産業遺産の活用モデル」構築が目標である講座カリキュラムを作成していくことが求められるのであろう。

### 引用・参考文献

- 黒岩俊郎・玉置正美：「産業考古学入門」，東洋経済新聞社（1978）
- 加藤康子：「産業遺産 「地域と市民の歴史」への旅」，日本経済新聞社（1999）
- 矢作弘：「産業遺産とまちづくり」，学芸出版社（2004）
- 大下茂：「人の気を惹く地域づくりへの取組みの知恵・手法～地域の記憶を手掛かりに，地域経済文化おこしによる地域力を高める技をみがく～」，千葉県総合企画部政策推進室（2007）
- 日本大学生物資源科学部 ※糸永浩司・日暮晃一・藤沢直樹ほか：「鴨川ホリスティックツーリズム～鴨川市観光振興基本計画～」，鴨川市（2007）
- 平井東幸・種田明・堤一郎：「産業遺産を歩こう」，東洋経済新報社（2009）
- 大下茂：「行ってみたい!と思わせる「集客まちづくり」の技術」，学陽書房（2011）
- 小笠原永隆：産業遺産の活用と現代産業科学館の役割について－特に産業観光の観点から－，「平成 22 年度千葉県立現代産業科学館研究報告」17（2011）
- 小笠原永隆：地域資源としての産業遺産の活用について－講座「千葉県の産業遺産とその活用を考える」の実施を



通じて―,「平成23年度千葉県立現代産業科学館研究報告」18(2012)

大下茂・小笠原永隆:「松井天山の絵図に見る習志野の軍都の痕跡とまち歩きへの展開可能性に関する研究(平成24年度帝京大学経済学部ゼミナール研究成果 vol-1)」, 帝京大学経済学部観光経営学科大下ゼミ(2013)